

2020年度 須坂市小中学校のあり方検討会議 第2回 会議録（公開用）

日時 令和2年(2020) 8月4日 9:30~12:00

場所 須坂市役所第4委員会室

1 開 会（関教育次長）

2 あいさつ（小林教育長）

- 前回、伏木先生の「アフターコロナの学びのあり方について」は、須坂市の小中学校の学びのあり方を考える大前提となると思う。
- 特に、これからの学びが子ども一人ひとりにとって個別に最適化された学びに向かうことが大切だという点。
- 対面授業でなければ学べられない内容とは何なのか。
- 若いころ相田みつをさんと出会って大きな影響を受けた。みつをさんは「あっても無くてもいいものは、無い方がいいんだなあ」ということを良く言っていた。
- 伏木先生の個別最適化の話と、みつをさんのこの言葉が、私にはダブっている。
- 例えば共同追求と個人追及の内容を、先生方が本当に自分事として整理して授業しているだろうか。簡単にできるものではないことも、時間をかけてやっていかななくてはいけないと思う。
- 先日、須坂高校で、哲学対話の学年授業を参観した。例えば学校についてだとか、仕事についてだとか、大きなテーマについて問いをたてて、その中で自分の疑問を友達の意見を聴きながら自分事として考えていくという内容。
- 正に、答えのない問いに対して、自分の考えを修正したり、友達の意見を聴きながら自分の考えを確固たるものにしていくというところがとても大切だという事を実感した。
- 市内の中学校でも取り入れるところがあるが、答えのない問いに対して、自分が友達の意見と交換させながら進めていくという具体を見たようで、とても参考になった。
- 学びのあり方について、今いろんなところで模索されているけれど、自分自身を考えると、問いが深まっていくばかりである。
- この会は、須坂市の小中学校のあり方はどうあったら良いかという事を問いのたどり着く所に置いてはいるが、他の時代と違うのはウィズコロナ・アフターコロナでも、子供たちの学びを私たち自身が咀嚼していかなければ、なかなかそこにたどり着くことができないということ。

- 答えを出し合うじゃなくて、問いを深め合うというような、そんな話し合いになって、それが何となく私たちの中で共有されていくことが、まず第一に大事じゃないかなという事を思っている。

3 議事

(1) 前回の会議で求められた資料について

① 地域の中で自己肯定感を育む事例などの紹介

伏木座長：

- 私は、仕事で毎年北欧のフィンランドへ行く機会があるので、そこでの象徴的なエピソードを紹介したい。
- フィンランドの田舎の学校に行ったときに、「貴方は将来何になりたいの？」と聞いたところ、ある子は「僕は看板職人になるんだ。そのためにカラーコーディネータの勉強をするんだ」と答えたので、「なぜ？」と聞いたら、「この町は殺風景だから、もっと明るい町にしたいんだ。だから僕はカラーコーディネータの勉強をして、看板職人になって、この町の彩を変えたいんだ」と答えてくれた。
- 他の子は、「私は産婦人科のお医者さんになりたい」と言うので理由を聞いたら「この町の産婦人科の医師が少なくて、これから出産を迎えようとする女性たちがとても不安になっているというニュースを聞いて…。だから私はこの町で産婦人科のお医者さんになりたいんです」と答えてくれた。
- このように、小中学生が自分の住んでいる町に、自分がどう貢献するのか、何ができるのかという事を考えている。
- それに対して日本では「将来何になりたいの？」と聞くと、「ノーベル賞をとるような研究者になりたい」あるいは「YouTuber になりたい」「サッカー選手になってピッチに立ちたい」。そういう風な地域性、自分が生まれ育った故郷と接続されていない回答が圧倒的に多い。
- どうしてそうなるのか。私が思うのは、フィンランドの学校では「貴方はどうしたいの？」ということ子どもに頻繁に聞く。「貴方はどんな気持ちなの？」と聞くのに対して、日本の授業では、クイズになっている場合が多い。先生が答えを知っていて、その答えを誰が最初に答えるかというゲームになっているような授業が多い。
- そういう授業場面で、ちょっと考えて分からない子は、「早く、優秀な子、答えてよ」って待つ構えになる。誰も答えないと先生は違う角度からまたもう一回、自分の求めたい答えを子どもたちに質問する。
- 教師がいろいろ準備をして授業を整え、子供たちに参加させて予定通りの知

識・技能を身に付けさせる。それが日本の一般的な授業だったかもしれない。

- それに対してフィンランドの授業は、一人ひとりの子どもが主役になっていて、「こういう問題に貴方はどう考える?」「貴方はどんな気持ちになっている?」という問いに対してお互いの考えを出し合うことが優先されている。
- これは地域の中でも全く同じ。地域に出ていくと、地域に住んでいるお店の人、農業をやっている方々、通りで出会う大人、みんな子どもたちに同じように接する。家庭も同じ。「早く勉強しなさい!」じゃなくて、「貴方はその内容についてどんな考えを持ったの?」と聞く。家庭も、地域も、学校も、コンセプトがほぼ一致している。
- そうすると子どもたちは、「この学校に自分ができることは何だろう?」「この地域の中で自分ができることは何だろう?」という思考になりやすい。
- ところが私たちは、少なくとも私自身は、栃木県の農村でどう育ったのかというと、「いい学校に入れるように頑張りなさい」「いい大学に入れるように番張りなさい」「いい就職ができるように・・・」。競争原理の中で、地域からどんどん離れていく教育を受けていた。
- 中学・高校時代に地域学習をやった記憶が私には無い。教科書内容を覚える学習、問題集をこなす学習に特化していく。
- 私たちはフィンランドの教育のあり方に学べるところがあるのではないかと思う。
- フィンランドでは学費が小学校から大学院まで無料で通えて、医学部に進学した学生の圧倒的多数が、他国の医者に比べて儲からない自分の国で医者をする。北欧は累進課税が強いので、医師は年収が高いけれど、それだけ物凄い税金を払う。だから、一般庶民と、大学院まで行かないとなれない職業に就いている人の手取りはあんまり変わらない。みんな夏休みはこぞってボートハウスやバカンスに出かける。
- それに対して、イギリス、アメリカ、日本、韓国等では、医学部に行った人は、年収の高いアメリカの病院に就職するケースがある。
- フィンランドの学生に、「どうしてアメリカの病院に勤めないの?」と聞くと、「確かにそっちの方が収入は多いけれど、僕はこの町の医師になりたい。この地域の医療に携わりたい」という答えが返ってくる。
- なぜそうなるのかっていうのは、教科書の影響でもないし、校長訓話の影響でもないし、教育長からのメッセージが影響したわけでもないでしょう。日常の学校の教室で、家庭で、地域で、子どもとの対話のあり方、子どもに何を求めるのかということ。
- テストの点数を求めるのではなくて、貴方の感じ方、貴方の考え方っていうこ

とを大人が同じ一人の市民として、とても大事にしてくれる。

- まあ、国が違うと状況が違うので、私たちが他国を真似する必要はないけれど、私たちはやや、個性とかその子自身の考えということよりも、客観化された数値で子どもを評価してこなかっただろうか。進学できた学校の学歴で相手を評価してこなかっただろうか。
- これからの時代、少子化がどんどんと進んでいく。学びは、個別最適化という教育理念が求められるようになってくる。
- そういう中で、私たちは、人々のキャリアをどう考えていくのか、生き方をどう考えていくのか、学校のあり方は地域と一体化して考える必要がある。須坂なら須坂でどういう教育が、20年後に生きる子どもたちに必要なのかを考える、そのヒントとして今日はフィンランドという国の話をさせていただいた。
- こういうコンセプトに、教育先進国はどんどん変わっている。デンマーク、スウェーデン、オランダ、ニュージーランド、最近ではシンガポール、エストニア・・・
- この動きの中で、私たちは古くからのこの国で大事にされてきた教育を受け継ぐ必要があると思うが、それと同時にいつまでそれをやるの？いつまでその考え方でやるの？ということを考える時が来ているかなと思う。
- 地域を愛する子ども、地域を大事にする子どもは、授業の中で地域学習をやればそうなるのかというと、そんなことはない。どういう考え方で子どもと大人が接するのかということが、とても決定的であるということ、雑誌『信濃教育』の原稿の中に書いた。
- 私は生まれ育った栃木県栃木市の農村の長男で、一度故郷を捨てたけれど、今はとても大事にされていて、月に1回はなるべく帰ろうとしている。どうしてそういう気持ちになってきたのか、どうして若いころは故郷を捨てようと思ったのか、そんなことを書いた。また、未来の地域がどうあるべきか、という内容も少し書いたので、時間のある時に読んでいただければと思う。

②須坂市から市外の中学校に進学した生徒数

事務局：

- 須坂市に在住しながら長野市なりの公立・私立の中学校に通っている生徒数の推移を平成18年度から表にしてみた。
- 全体的な傾向としては増えている。平成24年から27年にかけて山があるが、このあたりで日大の附属中学校の進学者数が増えたことや、清泉女学院の中等部が開設したことがあって山になっているが、全体的には右肩上がり。
- 一番多いのが信大附属中学校への進学者。信大附属への進学者が右肩上がりの傾向であり、これが全体に影響を与えていると感じている。

- 市内の生徒数は右肩下がりなので、その中で増加傾向というのは長野市なりの中学校を目指す生徒がある程度増えてきているのではないかと窓口の担当者もそのような感触をもっている。

③臨時休業中の家庭学習の指導状況

事務局：

- 臨時休業中の4月13日から5月10日までの家庭学習の状況について、各校から聴き取りをしてまとめた。
- 聴き取りをした観点は①課題の与え方②評価方法③児童生徒への支援の方法④Web教材の活用の促進⑤その他の5点。
- 課題の与え方は、準備期間が非常に短かったことから、本年度の学習、それから前年度の学習のいわゆる定着を図る課題、これが中心となった。それに加えて、予習的課題を取り入れてもらいたいという事を市教委の方からお願いした。
- 中心は紙ベースだが、学校によっては体感トレーニングやラダートレーニング等も奨励していた。
- また計画表については、市教委としても学校生活のリズムを家庭生活の中でも取り入れてもらえるように、どの学校もある程度きちんとしたものをお願いしていたことをお願いしている
- ②の、課題の評価方法については、計画表や課題に、自己評価できるよう工夫している学校が多くあった。評価の期間は、1週間あるいは登校日に合わせて担任等が点検評価し、子ども達の方に返すという方法が一般的。個人内評価で、励ましながら次の課題へ取り組み、この意欲を促していく、というようなこと。
- それから分散登校を利用して、子ども達の面接をしながら課題の確認をしている学校が多くあった。
- ③の児童生徒への支援については、家庭訪問や電話を使っての支援、それからWeb教材の紹介・YouTubeでの学校からの発信、それからZOOMを使った健康観察、それからオンライン授業の導入など、オクレンジャーを使っての毎日の健康観察等、校内に自主活動室を設けて対応したというところもある。
- この区分が学校によって大きく異なっていた。特にオンラインやZOOMの利用に長けている職員のいる学校では動きが速かったが、準備期間が短かったという事もあり、自分の学校でできることを最大限に生かす、というような対応をしてもらった。
- ④のe-ラーニング・Web教材の活用につきましては、市で全小中学校に導入しているe-ライブラリの活用を勧めたり、それから文科省や県教委からも紹介されている教材を学校だよりやホームページに掲載して各家庭に周知した。

- その他、Web教材につきましては、家庭のネット環境の違いに加えて、ネットトラブルやゲーム依存など、これまでネットの危険性を学校や家庭などで学んできているということもあり、オンライン学習に対する抵抗感が最初の頃はあった。
- ただ、オクレンジャーなどを使って学校からの意見や子ども達の情報が入ってくることによって、学校と家庭・子ども達が情報交換をする必要性を、この期間中感じていた。
- ZOOMによって健康観察を実施している学校が、周りの学校に紹介したり、グーグルフォーエデュケーションによるオンライン学習の紹介など、このようなWeb学習があるということをお互いに紹介し合うことによって、今まで躊躇していた学校もオンラインの学習の方法を検討し始め、この期間中に大きな動きがあった。
- 特に小学校低学年については紙ベースになるという考えがあるが、タブレットが全員に配布されるという見通しが立ち、その可能性についても探っているのが現状。
- また現在は、いつ臨時休業に入ってもいいように、オンライン授業導入の準備を進めるとともに、校内会議も対面だけでなく、各教室においてオンラインで試行するなど、まず自分達がやってみようというようなことを導入している学校が増えてきた。短期間ではあるが、臨時休業中をとおして、学校が大きく変わってきていることがよく分かった。

④信州やまほいくの取り組み

垂澤委員：

- 信州やまほいくは2016年の4月からスタートしている長野県独自の、信州の恵まれた環境を活かして保育に取り入れようという制度。
- 当時、県の自治体サポート課の竹内企画官を中心に発足した制度。双葉幼稚園では、2017年の1月に、豊丘保育園と共に市内では初めての認定を受けた。
- 現在は37市町村で210園が認定されている。須坂市では11園で、公立の10園全ての園と本園が認定を受けている。
- 信州の豊かな自然環境と多様な地域資源を活用した体験活動について、一点事例を用いて紹介したい。
- ワラジムシとダンゴムシは似ているけれども違う虫だが、子ども達はこういったことに非常に詳しい。ダンゴムシとワラジムシの大きな違いは2つある。1つは、ダンゴムシは触ると丸くなり、ワラジムシは丸くならないこと。もう1つは、ダンゴムシの方が足が遅いこと。なので、石を持ち上げた時に、すぐにささき一

と逃げていくのがワラジムシ。ダンゴムシはいつまでたっても逃げない。

- 子ども達はこういった虫が非常に大好きで、中には虫博士のような大人顔負けの子もいる。
- じゃあダンゴムシの姿が、園の中ではどんな風な育ちの中に見えるのかというと、1歳・2歳のお子さんがダンゴムシを見ると、半分ぐらいのお子さんは食べ物だと思って口に入れてしまう。食べられないんだけど、分からないので食べ物だと思って口に入れてしまう。何でも口に入れちゃう年頃。
- これが、大体3歳くらいになってくると、ダンゴムシに興味を持ち始めて、ダンゴムシを捕まえ始める子供がいる。ところが、3歳くらいの子どもだと、ダンゴムシを捕まえることが楽しみであって、捕まえておしまい。そこからの遊びというものは広がらない。
- たいてい捕まえたダンゴムシというのは、牛乳パックやポッケに入れて、ポッケの中で干からびる。干からびるとダンゴムシは白くなるので、白くなってきてお母さんにお家で「これは何だ？」となるのが大体3歳の姿。
- じゃあこれが5歳になるとどうなるかと言うと、捕まえるだけでは子ども達は満足しない。例えば何を食べているのだろうか？とか、どこに住んでいるのだろうか？という風に図鑑を持ち出してきて調べたり、先生に虫を捕まえたいのだけど、ケースをくれない？と話す子が出てきたり、皆でダンゴムシのお家を作ってみたり、園外保育に出た時に、ダンゴムシのを見つけやすい場所と見つかりにくい場所というのを実際に学んでくる。
- 直射日光が当たるような石の下にはダンゴムシがいなくて、じめじめした所にいるが、そういったことは自然体験を得て子どもたちは学んでいく。
- 信州やまほいくには、幼児期に育てたい3つの柱というのがある。一点目は知識及び技能の基礎、二点目は思考力・判断力・表現力の基礎。三点目は学びに向かう力・人間性ということ。
- この大きな3つの柱があるのですが、これを、自然活動を通して学んでいこうという事になっている。公立保育園の事例では、主に野菜を育てたり、地域住民との交流の事例が載っているが、これをしなくちゃいけないという事ではなくて、信州の自然を保育に活かして、そこから子どもたちの多様な学びを経験していこう、という取り組み。
- 本園も休校中にオンラインを少し導入したが、ワラジムシとダンゴムシの違いを、オンラインで学ぶためにするのではなく、幼児期としては、オンラインというのは先生と子供とのつながりを保つためのものであって、ダンゴムシとワラジムシというのを直接自然の中に出て、見つけて、子ども達と深め合って、学ぶ、といったことがやはり大切なのではないかと考えている。

- 今後もまたコロナ禍の中で、どんな形で教育の方が進んでいくか、不透明な部分
が大きいですが、幼児期は多様な経験が大事で、オンラインで触れるというよりも、
子ども達の直接的な体験が大事じゃないかという風に考えている。

⑤須坂市における就学援助費の受給状況

事務局：

- 児童生徒の経済格差について資料があったらという事で前回リクエストがあっ
たので、それに対する資料として用意した。
- 就学援助費とは経済的に苦しいご家庭の学びを保障するために、市から学用品、
給食費、修学旅行に係る経費を支給している制度。
- 対象者は生活保護世帯の所得の1.3倍に該当するご家庭までで、平成13年から
平成31年までの受給者を表にしてまとめた。
- 小学生の受給率は折れ線グラフが示す通り右肩上がり。平成13年度は5.4%だ
ったが、平成31年度は13.8%という状況。
- 最近10年間は、平成21年度と平成31年度を比較すると、3.8ポイントの増だ
が、平成13年度と平成21年度を比較すると4.6ポイントの増で、最近10年間
よりもその前の期間の方が増加率が高い。
- 理由としては、学校で積極的に声を掛けるようになったことと、保護者の意識が
変わってきていることがあげられる。
- 中学生の受給率については、平成13年度が6.5%、昨年度が15.6%という事で、
小学校よりも高い。
- この間の受給率の経過は折れ線グラフで表されているが、少し増減が見えるが
全体的には右肩上がりで受給者が増えてきている。

(2)意見交換

伏木座長：

- 就学援助費の学校別の受給者数を見ると、豊洲小学校だけは右肩上がりという
感じではないが、このあたりの学区に何か特徴はあるのか？

教育次長：

- 実は、就学援助の率が高いところというのは、上から行くと小山とか、豊洲とか、
旭ヶ丘、このあたりがちょっと多くなっている。豊洲小学校については地域内に
県営住宅といった団地が多い。旭ヶ丘も一緒だが、そういったような特徴があ
る。

勝山委員：

- 臨時休業中の家庭学習の指導状況について、学校によって違いがあると思うが、今回のコロナは突然で、恐らく調整する期間は無かったと思うが、学校間の連携や情報交換の場というのが今回取れたかどうか、どんな状況だったか教えてほしい。

島田委員：

- この臨時休業の間に、何回か臨時の校長会を開いてきている。その中で、それぞれの学校の実践等をお互いに情報共有したり、あるいは困っていることを出し合ったりとか、そんな形で進めてきた。
- オンラインなどに関わる部分では、比較的導入が簡単なZOOMを取り入れた井上小学校から積極的な発信があり、本校ではグーグルフォーエデュケーションを導入するというような形で、先行して進めながら、実際にこういった形で授業を行っている、というようなことを動画で校長先生方に紹介した。
- また、職員間でも連絡などを取り合って、授業を進めていく、というような取り組みであったりとか、研究主任の間で、市の共有フォルダの中に各校の取り組みや課題を保存しあって、それを共有しましょうというような動きをしてきている。

小林教育長：

- 勝山委員の質問された「学校による違い」については、例えば、「こうやってください」と市教委から出した時に、それが果たして学校の先生方が自分の事として、自分の学校の子どもの事としてそこからスタートできるかどうか。あの短い間の打合せの中で出来るのか非常に心配だった。
- まずは各学校で取り組んでもらって、その情報交換の中で「やっぱり大事なところを最終的には話し合わなければならない。」という事になってこれらの形になった。
- もう一つは、今回の臨時休業は家庭がもの凄く大事な勉強の協力者になったということ。家庭が臨時休業中の学習についてどう受け取っていたのか、どう協力してもらったのかが非常に大事なので、全家庭、全保護者あてにアンケートを取った。
- アンケートを取ったのは保護者と子どもと教員。例えば「宿題の量はこれ位でよかったのか」ということについて、予想どおり学校と保護者の意識は全然違った。それがよく分かった。
- 今、そのことを分析して、この夏休み期間中には出来上がると思う。各学校が各

家庭とどうやって「宿題」や「これからの学び」を作っていくか、という事を「共有しない限り出来ないな」という事で、今、各学校でまとめに入っている。そんな段階です。

関教育次長：

- 先ほど豊洲小学校の説明が不足していた。実はあそこに北相之島という町があり、須崎市69町の中でここ10年の人口減少率がおそらく1番大きい。3割ぐらい減っている。それ以外の所は豊洲小学校の場合は昔ながらの農村地が中心で、北相之島という新しい団地の町がある、そこが非常に就学援助の率が高い。また、そこが1番人口が減っている。確か須崎市で1番減少率が高い。

本多委員：

- 外に出ていく生徒が少なからずいるという事が否めないと思うが、その辺の理由はどのようなところに在るのか少し気になる。
- 今、ICTが主力となってくるような学習環境の中で、学力格差が生まれてくる要因が3つばかりあると私は考えている。1つは職員集団の温度差とかスキル格差。1つはそれぞれの学校のハード面、施設設備の格差。もう1つは家庭の経済格差。
- そういったものが微妙に絡んで児童生徒の学力格差に影響するようなことがあれば、子ども達が不利益をこうむることになるので、そういった格差が無いようにやっていかなければならない。
- 1つ懸念するのは、例えば「外の中学校へ行きたい」という気持ちになってしまう要因が、そういったハード面とかソフト面で「充実しているんだ」ということになってしまうと、やっぱり目が外にがいてしまう。
- 地元の子は地元で育てるという考えでやっていくとするならば、外の学校との違いとか市立、特に私立との格差が無いようにしていくのが児童生徒の学力格差に繋がらない大事な方策と感じる。

関教育次長：

- ハード面については、「私立の学校と」と言われてしまうとなかなか難しいが、県内の他市町村と比較した時にそういった事が無いようにという配慮はしている。
- 先ほど就学援助の資料も出したが、就学援助についても須崎市が県内19市と比較した場合に決して水準としては劣っていない。どちらかという支援助としては手厚い方という風を感じている。おそらく就学援助率は19市で1番高い。

- 単純に市民の所得が低い方だと言われてしまえばそれまでだが、そうではなくて在籍率でみると1番高い状況に今あると思う。

羽生田委員：

- 児童センターに勤めているので、センターの方から気が付いた事をお話したいと思います。皆さんご存じのとおり須坂市は3センター8クラブで小学校のお子さんの放課後、長期休み期間、それに今回のコロナの休校の対応している。
- 東部児童センターは長期（長期休み期間）と日々を併せると80人登録しているが、この夏休み期間中は一日最大で63人の子ども達が来る予定。
- コロナの3月は急だったので、学校の校長先生から色々なご協力をお願いしたり、センタークラブの方でも「ご協力できる方はおじいちゃん、おばあちゃんのところへ」とお願いしたので、だいたい最高40人前後だった。
- それでも狭いセンターは密になるので、学校の先生たちも協力していただいたのですが、その中で森上小学校がクラブに担任の2名の方が支援してくれると書いてあり、これはありがたいなと思った。
- 子ども達のカリキュラム、時間割の中で、この時間は「勉強しましょう」となっていますが、大勢いる中でなかなか1対1で見たりできない。勉強をやらない子がいたり、おしゃべりしていたので、「密になるからおしゃべりはやめましょう」「机の配置を考えましょう」とか言ってもなかなか思うようにならない。
- 毎日来る子は朝8時半から6時。長い時間の中で子ども達が過ごして、疲れ切って家に帰って、果たしてこれで宿題をするのかと思うが。その中でこの長い3カ月の間、センタークラブを利用しているお子さんの学習はどうだったのかと思うと、私も胸が痛い。ここで2名の支援の先生が来てくださった事を聞いて、このようことをしてもらおうと私たちより子ども達が「先生が来たんだ」と、少しの緊張と頑張る力も付いたところで宿題が少し身に着くのかなと思った。
- これからも、この様になった場合にこの様な対応をして頂くとありがたいなと感じた。

山岸委員：

- 先日6月15日に須坂高校の1年生の英語の授業を2クラス参観した。結論からいうとオンライン学習の成果が非常に大きいという実感を持った。
- 若い女性のA先生とベテランの男性のB先生。この2つの授業でしたけども、A先生が授業の中でこんな話をした。この日は月曜日なので前の日は日曜日。「昨日約束の宿題14時までにみんな出してくれたね。ありがとう。」みたいな感じで話をして。つまり、この授業の時には先生のコメントがもう既に全員のコメン

トが入っている。

- 1番最初に感じたことは、生徒1人1人がやるべきことを明確にして授業に臨んでいる。キラキラしているイメージがあった。
- そんな中で先生が授業を進めていて、生徒の文を画面で紹介しながらポイントを押さえていく。「〇〇さん、面白いところに気付いたね。」とか「〇〇さん、文法的にはこれでいいのだけど、こんな表現の仕方があるよね」みたいなことを話していく。
- 生徒はその1つ1つを自分のタブレットに書き込んでいたり、プリントに書き込んでいたり、ICTの授業なんだけども生徒の机の上にはタブレットがあり、スマホがあり、辞書があり、筆記用具があり、プリントがありで、生徒は自分に合うようにそれを使いこなしていたと感じた。
- そしてもう1クラスの方では画面に映し出されている写真を見て、「この写真から発想したことは何。」「そしてその理由はなんだろう」ということを考えていました。1人1人で考えていたものをその後グループディスカッションしていた。
- その発表を聴きながら自分の考えを深めていく。発表の手順はALTの先生がどんどん進めていくのだけど教科担任のB先生はその間、1人1人考えをずっと確認していく。というような授業。この画面に映し出されたのがA先生の授業でもやっていた。
- ここで2つ目のポイントだが、「職員の連携が非常にあるな」ということ。同じような場面があったので聞いてみると「教科研究が非常に充実してきている成果」だと。
- 「できる先生、できない先生があってはいけない」職員研修の中で教材や機器をどのように使っていくか、それを先生方がワクワク感をもって共有している。そんな気がした。
- 3つ目の感想はいつでも何処でもということ。A先生が授業の中で「私、みんなが出してくれたものを美容室で見ました」みたいに言ったのに生徒の反応が薄かったので透かさず「あら、私の髪型には興味がないのかしら」みたいな話をしていたが、私は「美容室で見ていた」に非常に興味を持った。
- それを「時間外勤務だとか、家庭に仕事を持ち込んで」と言われてしまえばそれまでだが、生徒1人1人に自分の時間を有効に使いながら手厚く指導できている。そして翌日の授業にしっかりと生かされている。最近よく聞かれるワーケーションとはニュアンスが違うと思うが、それに近い様な感覚を持った。これは生徒側にも言えることだと思った。
- 4つ目は無駄なことを切り離す。例えば学校で「提出物を幾つか出しなさい」と

- 言ったときに、それを無駄という言葉で片付けるつもりは無いが、それが「提出率がどうだったの」みたいなのところに頭がいかってしまうとどうなのか。これは1つの例だが、中身を削いで学ぶ方に集中していくってというような感想を持った。
- 2つのクラスを参観した後ふと思ったのが、これが対面式の一斉授業だったら、どれだけの生徒が途中で考えることを止めてしまったらどうかと。そんな気もした。
 - 誰もが休むことなく1時間の授業を自分のものにする事を楽しんでやっている。そんな感想を持った。
 - 新型コロナ感染症の事態を抜きにしても、このオンラインの学びは取り入れてこなくてはいけなかった事の様思った。「それぞれで頑張ってください」と国の方は言うかもしれないが、もちろん全てではないが、このオンラインを日常的に活用することに踏み込むか踏み込まないか、早くスタートさせるかユックリ考えるか。この差が直ぐに表れてしまうのではないかと、というような危機感すら覚えたような気がした。須坂市で大きく進めたらいいのかなってという感想を持った。

関教育次長：

- 先生のスキルといった、そういった所も大きいのかなと思う。市としても、その辺をどうやってサポートしていくかが1つの大きな課題だと思う。

本多委員：

- 色々な方に見ていただいて非常に参考になるご意見を頂戴している。これから感染レベルが2からレベル3になるような事態の中でITCの利活用は迫られていて、長野市内の色々な高校も須坂高校の取り組みにもの凄く関心を持っている。
- あまりにリクエストが多かったので明日もまた午前中に公開授業を行うが、今、紹介していただいたような、事前にオンラインで課題を提出してあって、それを授業の時に既にできているものを基に議論して理解を深めていくようなやり方をしている、それを一般的には反転授業と言うが、今回の件で怪我の功名というか、学んだことは沢山あるなという風に思っている。
- 瞬時にして個人の力と集団の力を授業者が把握できるので、個別最適化がきちんとできるというのがICT利活用の授業のメリットかと思う。
- たとえ休業になっても「須坂高校は大丈夫」という言い方をしてしまうと非常によろしくないと思っている。そういった差異が無いことが子ども達に大事である。少なくとも義務教育の小中の中ではそういった格差はあってはいけないと

思う。

- 実は、短期間の内に先生たちが繰り返し繰り返し研修をした。つまりそれによって職員の温度差とスキルの格差がなくなったということで、それなりに時間も費やしたということ。

伏木座長：

- 色々皆様のご意見を出されたところで、それらを絡めるような議論をする必要があるかなと思った。
- 「やまほいく」という考え方は長野県次世代サポート課から発信されて、とても貴重な発想なので全国から注目されているが、子どもが自然の中で色んなものを身に付けていく、感性を豊かにしていくこと、「これを大事にしよう」という話があった。
- それから、どうやら家庭・地域によって経済的な背景によって学習生活に困難を抱えているご家庭があって、行政も対応しているけれども、今後を考えた時にどのような方策が必要かという話があった。
- それから、中学・高校へと上がるにしたがってどうやら進学系の学校を目指して出ていくという流れもあるようだ。そういう事を今後10年、20年先を展望してどう私たちは考えていくべきなのかという話があった。
- それから須坂高校をはじめ、新たな「反転授業」だとか、「ロイロノート」（教育支援アプリ）なんてものを使いこなしながら、今まで私たちの世代が経験してきたような新たな学習方法が紹介されている。先生たちもそういう研修を受ける時代になる。そういう状況になってきた時に高校における学びについてのはどう考えたらいいかってというような、いくつかの観点が出てきたと思う。
- まだ抜けていることもあるかと思うが、これらを一連のごとく繋いでいきたい。つまり小中学校のあり方検討会議の議論は、局所的に、ピンポイントで焦点を当てることも大事だが、子どもの側に立って、幼児期から義務教育、高等教育に移っていくまでの、そういうスパンで見た時に、須坂市は子ども達に対して、いったいどういう保障をすべきか、どういう環境を整えるべきかという観点に立つことが必要だろうと思う。
- そんな観点から思うところを委員の皆様からは是非ご意見を頂けるとありがたい。
- 皆さんからお話いただいたことに関連して私の思うことを申し上げたい。まず、須坂高校の本多先生からお話のあった3点、「職員集団のスキル・能力の問題」「学校環境、ハード・ソフトの面を含めた格差の問題」「家庭の経済状況の問題」について、私も同じように考えている。

- 職員集団のスキル・能力ということはとても重要な問題。日本の教員人事は世界でも珍しく定期異動があって、ずっと須坂に残っていただける人とそうじゃない人がいる。
- その中で、私は上高井郡の教育会に関わって8年間中心講師をしてきたが、研修のための同好会的と言いますか、学校単位ではなく学校を越えて先生たちが学び合うシステムがこの地域にはあるので、このネットワークを上手く活用していく必要があるかと思う。
- 例えば、わざわざ学校を出て集まらなくても、こういうネットワークをオンラインの遠隔会議で先生たちはできるはず。もちろんできない事もあるが、日常の先生たちの学びのツールの中で、オンラインツールを活かしていけば、須坂高校のような取組が中学校でも小学校でも、もっと身近なものになるだろうと思う。
- それから学校環境の格差は急いで教育委員会・市がG I G Aスクール構想の中で予算化して進めていくべきだろうと思う。
- 学校もそうだけど、役場ももっと次世代に合わせた環境を整えないといけないと思う。各家庭でもごく普通にそういう環境がつけられるようになるといいと思う。
- それから3番目の家庭の経済状況。これもやっぱり重要視しなければいけないが、こちらで私たちは各家庭にどういう経済的負担をかけているか見直す必要が無いだろうか。
- なぜ全員に算数セットを買わせる必要があるのか。なぜ書道セットを全員が買わなければいけないのか。色々な慣例を見直して、学校でそろえてそれを皆で使い合えばいい物もあるだろうし、一部の学校では制服やカバンを先輩から貰って、傷が付いているかもしれないけれど、それを大事に使い合うことを始めている学校もある。そうやって地域の先輩が地域の後輩に大事に譲り渡していくというような文化を須坂の中で育ててもいいのではないか。
- 本当に夏休みの宿題で渡すサマーワークが必要なのだろうか。本当に必要な家庭学習とはなんだろうかと考えた時に、もっと子どもが自主的にトライできるようなもの、本当に必要な最低限の家庭負担ということを考えていかないと、各家庭でインターネットにつながる環境を整えるために「月5,000円かかりますからこれを負担してください」と言われても、家庭の方も協力するのにいい気持ちにならない。
- けれども、今までこういう負担を、学校徴収金でこれだけ請求していたけれども「これを半分にします。」とか「こういうものを見直します。」という努力と共に「未来を生きる子ども達のために、この通信環境を家庭でも考えて下さい。」とお願いする。本当に大変な家庭も増えてきているので、そういう工夫をしていく

必要があると思う。

- 8年前に、国立教育政策研究所で政府のいろんな委員と共に人口減少社会における新たな教育制度のプロジェクトをやっていたが、結論として日本の現状では高校のあり方が重要。
- 高校が撤退して無くなってしまうと、小中学校はどんどん寂れていって人口減になりダメになっていく。「この高校なら行きたい」という高校が学区域にあることが中学校にもいい影響を与えて小学校も頑張るといふ流れも現実にはある。
- そういう意味では、今日須坂高校の例が紹介されたが、須坂高校を核にして須坂市内にある他の高校も巻き込みながら高校が元気になると、「あそこの高校に行く」と学びが楽しい、「学校に行く価値がある」みたいな、そういう須坂市の文化を作っていくことによって新たな学習保障というか、学びのあり方が小中学校・特別支援学校含めて変わっていくような気がする。
- 是非今までの資料を参考にそれぞれのお立場から思う存分、抽象的な話でもいいので思うところお話いただきたい。委員の皆さんだけではなく事務局の方々も一緒になって考えていきたいと思う。

近藤委員：

- 今、伏木先生の話の中で「子どもたち全員が同じものを買わなくてもいいのではないか」という話に関連して、保護者の中には「兄弟が使っていた物をそのまま使いたい」とか「もう子供が小学校・中学校に居ない場合は、そのまま学校に残して使ってもらえばそのままリユースできるのではないか」という意見を頂いている。
- ただ立場的にPTAとして「そうですよね」と中々言いづらい部分があるので、まずは「保護者・PTAから変わっていかねばいけない」という声から私たち保護者から出ることによって、学校も考え直していけるのではないかと考えている。
- それと地域性についてだが、PTAの中には自治会の町単位で支部PTAという組織がある。殆どが町の育成会と連携して活動しているので、どちらかというと学校単位ではなく町単位で動いている。
- PTAとしてそこを大事にしたい。先ほどの「地域として一体化」、「数十年後どういう形の中で子ども達が自分たちの町なり須坂市に残ってくれるか」というところが大切になっていくと実感している。
- 私も育成会の事業に約6年間関わり、感じたことは、小学生までは目を輝かせながら町の育成会に出てきてくれるのに、中学生になると部活も忙しく、思春期の時期とかさなり参加しづらくなってくる。

- できるだけ中学生に対しても参加し易いものを作っていこうと、中学生が小学生の面倒を見るような機会を与えて子どもたちに責任を持たせて運営をさせたりした事はあるが、全員が全員参加できるわけではないので非常に悩んだ。
- 1人1人が地域に対して愛着を持って行事を作っていけば皆が参加してきてくれるというのは育成会長をやった時の実感。
- 市内の町区育成会長は一生懸命試行錯誤しながら、できるだけ子ども達が参加し易いものをつくっていかうとしている。非常に苦労しながら「それが地域に繋がっていくんだ」という自負で皆頑張っていると思います。
- 育成会ばかり、PTAばかり、地域に根差したものを作っていく事が大事だと思っている。

小林教育長：

- 今の近藤委員の話に関して伏木先生に聞いてみたいのが、例えば地域と子ども達の非常に密接な関わりというのはどうしたらいいのか、ずっと私たちも考えている。フィンランドの子ども達が地域ってものに、もの凄く愛着を持ちながら生きていける。その原動力というのは地域と子ども達がどう関わっているからなのか。

伏木座長：

- 全てを把握している訳ではなく、あくまでもこの15年間での印象ではあるが、先ほどお話したとおり、特別な事というよりも日常的に子ども達を大事にするとういのか子どもファーストということ。
- それは日本でも同じことが言えるが、結局大人の枠組みの中で子どもにレールを敷いて載せていくという風にも思ってしまう。
- でも、フィンランドなど北欧諸国の場合、チルドレンファーストというのを徹底していて、例えば授業中の45分間ずっと座らせておくのは「拷問だ」と考えている。それは学習効率が悪いし、体にもよくないし、脳にも良くないという研究結果もあって必ず授業中に動くようにしている。学ぶ側に立つことが徹底している。
- チルドレンファーストというのは、例えば「公民館どうしよう」って時には、公民館には高校生も中学生も参加していいと考えるので若い人たちはどう思うのか、中学生はどう思うのかと必ず入れる。
- 信州型コミュニティスクールに子どもの参加は入っているか。私が調べたところ全国どこも子ども達が運営委員に入っていない。フィンランド、ニュージーランドは絶対に子どもが入る。その地域に生きている市民の1人として子どもを

リスペクトする。

- 今コロナ禍だから「学校行事どうしよう」、「修学旅行の行先を変えないといけない、どうしよう」、「この授業どうしよう」と、先生たちはとても大変な状況で、消毒作業までやっている。
- フィンランドだったら、間違いなく子どもと一緒に考えて。「だって自分たちの授業だから」、「自分達の学校行事だから」。日本では子ども達を議論に参加させることは少ない。
- つまり、子ども達は「ここに世界遺産があるから好き」とか「ここが儲かるからこの町がいい」とか「この町がカッコいいからこの町に住みたい」じゃなくて、「そこで自分達は何を考えさせてもらったのか」、「どういうふう風に自分が自己肯定感を高めさせてもらえたのか」という大人と出逢い、地域の人と出会い、そういう経験の積み重ねによって「この町をなんとかしたい」と思う。
- 須崎市や長野県では学べないこともあるから一旦東京へ行くけど（一旦海外へ行くけど）、やがてはここで家族と一緒に生活しよう。という気持ちになったり、戻ってこれないかもしれないけど、この町の事をずっと応援しながらふるさと納税しよう、となったり。
- つまり自分が社会に出ていくまでのプロセスで、どれだけ自分はこの町と関わったか。主体的に自分が参加できたか。自分の意見を聞いてもらえたか。そういう経験がそのまま、ふるさと学習になっている。
- これはどこの国のどこの地域でもできるはず。ただ、大人が「子どもを導かなきゃダメなんだ」って思ってレールを敷いて教え込んでいくか、ちょっと冒険だけでも、試行錯誤して失敗もあるかもしれないけど、子どもと一緒に町のあるあり方や学校のあり方を考えていこうとする大人でいるか。大人の意識を変えるのはとても難しいけれど、そういうことをこれからの教育方針に据えていくかどうかという選択なんだろうと思う。

小林教育長：

- とても参考になったし、近藤委員が地域との関係で悩んでいる。やっぱり大人の感覚というのは、「正解があって、PTAがあって、その行事をどうするか」と全部考えてしまうけれど、そこに子ども側、受ける側がどう感じているのかという意識は大事であると思う。

勝山委員：

- 私達が学校にいた頃は、「修得」ということに非常に傾斜がかかっていたが、今はむしろ「活用」と「探求」の時代なので、そこへどう意識改革をもっていくか

ということ。

- 資料の中を見て思うが、非常にいろんな工夫をされている。これを、教員の中、学校の中、それから長い子どもの成長の期間からすると、幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校とも関係していくと思うので、共有されていく方法が必要ではないかと思っている。
- その学びの空間を広げていくためには、ICTを活用しなければできないし、それから近藤委員が言われたとおり、地域と連携し、どう学習空間としていくか、ということを考えていくべきだと思う。
- 今までは、学校独自だったと思うけれども、勿論中身の細かい所は地域性があるので学校独自で良いと思うけれども、例えばこんなことを地域とやりたいなという情報を、行政に求めた時に、その支えとなってもらえると、とてもありがたいと思う。
- すべてのことをやるということは、働き方改革と言われている中で、学校は相当厳しい。そういう点も一つ考えられることだと思う。
- 小中の連携というところを、学区毎にいくのか、地域毎にいくのか、そちらも関係してくると思う。この情報交換というのは非常に大事で、例えば私は井上小学校の、これは不登校の子供にも、とても良いのではないかと思ったのが、須坂技術情報センターのパソコンを利用して、そこでオンラインをやったということ。
- 国もだが、どうやって貸与するかということではなく、例えば公民館とか、地域で、近くだったら出ていけるお子さんがいて、そこに不登校支援員さんがいて、WEBで授業をする等、新たな環境を模索していくことも非常に有効ではないかと思う。
- これは特別支援教育と不登校や、困り感のある子ども全部に共通する中身と思う。学びの空間を広げることと、小中連携、中高連携というところと、今そのように思っている。

月岡委員：

- 市内小学校、今日はおそらく、どこも1学期の終業式だったかと思う。私もつい先ほど終業式を終えてこの会議に参加している。どのように終業式をやっているかという、須坂市で導入した「未来スクールステーション」校内ネットワークシステムを活用して、生のライブ放送で、各教室に「校長先生のお話」や「校歌斉唱」など配信して、ある意味校内でのオンライン終業式を行った。もうこのライブ放送のシステムなくして集会は成り立たないくらい、毎回毎回使用している。
- 入学式こそ体育館で行ったが以降すべての集会は、全校児童一堂に会すること

ができないので、このライブ放送を活用した。

- そういった中でも子ども達は、やはり友達同士繋がりたいと思っている。人と人の繋がりは大事なのだと改めて思う。学校へ行けない時期を過ごしたおかげで、学校のありがたみ、学校の友達との交流することの喜びを子ども達はひしひしと感じて、この1学期を終了した。
- 今、先生方のお話を聞いている中でも、やはり子ども達同士はつながりたいのだなと思った。その繋がりというのは、勿論友達同士もあるけれども、学校とも繋がりたいし、地域とも繋がりたいし、大人とも繋がりたいし、色々なところで繋がりたいと思っている。
- その繋がるという深まりを支援していけるような学校であり、地域社会である必要があるのかなと思う。それが実現できたら、「やっぱり須坂に帰ってきたいな」と、いつかそう思ってくれるようになるのではないかと、そんな気がした。
- 私は、自分が住んでいる地域社会で、お祭りを一生懸命やってきたけれども、お祭りというのは地域社会に根付く良いアイデンティティの源になるのではないかとずっと思っていて、獅子舞にしろ、祭り囃子にしろ、色々な活動に子ども達と一緒に加わってくれている。
- そして、子ども達を指導する大人と子どもとの繋がりや関わりが、強くできるように頑張ってきた。地域社会がそういう風に成熟してくると、それもひとつ、子ども達が地域社会に根っこをはやす材料になるのではないかと思っている。
- 学校教育とは関係ないかもしれないが、子ども達はそういうことをとても大事に楽しく活動ができるのだなと体験的に学ばせてもらった。子ども達は地域社会でお祭りという、神様は関係ないかもしれないけれど、繋がり、体験を通してアイデンティティを培っていくのかなと思っている。
- 「共有すること」と、「繋がりがあること」と、「発信すること」がすごく大事だと思う。学んだことを発信していくこと、また機会を設けること、場を設定してあげること、またきちんと評価してあげること、共有していくこと、そういう体験が必要だなと思う。

佐藤委員：

- 今、月岡委員がお話になったように、ほとんどの小学校で、全校集会を、各教室で実施している。職員間の研修も、校内でWEB会議をやっているし、市教委の方で開催している会議についても、各校にいながらにして行うということも、場を作ってもらっているので、そのあたりの経験については、非常に急速に進んでいるなということを感じている。
- 2学期からICT支援員が各校を巡回しながら指導していただく計画ができて

いて、各校ではその場で、何を教わればいいのか決めだしている最中かなと思う。

- それから、With コロナ、After コロナの学習というところで、自立して学ぶ力という言葉が非常に広がっているが、自立した学びはどのような学びなのかということが、職員の中で共有するということが大事だなと思っている。
- 個人個人は色々なイメージで掴んでいるけれども、それは目の前の子どもに合うものなのかどうなのか、個人の考えがそれでいいのかどうなのか、どうやったら深めていけるのか、そういう意見交換をする場が早急に必要だなということを感じている。
- そして、小中連携を考えた時に、発達段階に応じてどういう段階を踏んでいけばいいのかということ、私達が深めていくことができるということが、自立した学びを確立するために不可欠だと思う。
- 今回休業中に、保護者の方々に非常に、協力者という立場で本当に頑張っていたが、自立した学びとはどういうことなのかということ、保護者の方々とも一緒に考えながら、お互いに意識改革しながら進めるということをやらなければと思っている。

(3) Web 会議体験

事務局：

- 皆様の手元にあるパソコンに、伏木先生からお借りしたポケット Wi-Fi を繋げて行うことを考えていたが、パソコンのセキュリティ設定が高い上に電波状況も悪く、Wi-Fi に繋がらない状況。

伏木座長：

- それでは、次回にする。各学校で「未来スクールステーション」に入っているということなので、先生方も慣れていたり、Zoom を体験されていたりする学校も増えてきたのでいいかと思うが、私ども日常的にオンライン会議とオンライン授業やっていると、どんどん進化しているのがわかる。
- グループワークなども、64人の受講生を4人16グループに分けて、ブレイクアウトセッションというもので、4人グループでディスカッションさせて、完全独立の部屋で4人グループになるのだが、そこで4人ずつディスカッションをして、時間を決めて部屋に戻ってくるということが出来る。
- その4人グループに別のグーグルクラスルームなどで場所を共有させると、一枚の模造紙と同様のデジタルシートに4人が同時に書き込み合える。付箋も貼れる。マジックの時には書き直しが不可能だったけれども、デジタルなので、い

くからでも文字を大きくしたり小さくしたり書き直したり、色を変えたりできる。

- 私は今シーズン、模造紙代がまったくかかっている。マジックを教室に持っていく必要もない。そのようなことがコロナのおかげで初めて気が付いた。そういうことができる時代になった。
- つまり、長野市の学校だけでなく、北海道の学生とも一緒にやることができるし、ニュージーランドの学生とも、時差さえ考えれば一緒にできる。この会議もやろうと思えばできる。そういったことの一部を先生方にも少し体験していただくと思っていた。しかし今日のWEB会議体験は無しということにする。
- 続いて、先生方から重要な論点をお話いただいたが、私の方から自律的な学びということに係わって、データもあるので少し時間をいただいて話をしたい。

【パワーポイントによる話題提供】

- 皆様からこれに引き続いてご意見やご要望等ありますか。例えば、幼児教育の観点から、小中のあり方というタイトルではあるけれども、すごく大事なことだと思う。幼児期の環境と教育。何か今の議論をお聞きになって、補足や追加等で何かコメントがあったらお願いしたい。

垂澤委員：

- このコロナ禍の中で、東京でも非常にテレワークが増えてきていて、若者が今まで東京に行かなければできなかった仕事が、地方にいても、東京の企業に勤めているながら、地方に戻ることができるということが可能になってきていると思う。
- そういった After コロナの中で、今我々が行っているあり方検討会のようなものの中で、須坂市の教育は幼児期から高校までこういう教育モデルがあると示せると非常に全国の先駆けというか、全国から魅力のある教育ができるのではないかと、お話の方参加させてもらった。

伏木座長：

- 今世界中で注目されているのは、非認知能力というもの。グリッドとも呼ばれているが、これは幼児教育の段階からとても大事だと言われている。粘り強さ等の力が備わっているかどうかは、学力にも、人生の成功にも大きな影響があると言われている。その多くは、幼児教育の「砂場」だとか、「森」とかそのような場での体験などと大きな因果関係があると言われている。段々と私たちは、そういう子どもの環境を奪ってしまっているのかなと思う。一説によると、空地が世の中で激減していると言われている。空地がとても重要だという研究も出てきている。

小林教育長：

- 今の話に付け加えるが、公立保育園がやまほいくに入ろうとした時に、色々な意見があった。保育士の中にも、「今、私達がやっていることは、もう十分自然体験学習じゃないですか」とあった。私もそう思った。須坂の子ども達はみな、野原に出て色々なことをやったり、先ほどのようなダンゴムシと戯れたりしていた。
- ただひとつ気になったのは、自然体験はしているけれど、それが教育になっているのかどうか。つまり、子ども達も保育士達もその後の価値、とても素敵な価値が、自分の生き方等にちゃんと加えられていくことがとても大事だなと思っている。
- 嬉しいことに保育士さんの研修会の感想を読んでいくと、毎年毎年少しずつ感想の質が良くなっている。抽象的でいけないのですが、今まで自分がやってきたことが、これはこういう意味があったのかということに自分自身が気付いて、子どもとまた向かい合おうとしている。
- そういうことから考えた時に、幼児教育というのは、保育+教育の部分で、ものすごく大事な意味があるのではないかと思い、もう少し見守っていきたいなと思っている。

伏木座長：

- 私は東京で小中高の教員をやっていたが、長野にきたら信濃毎日新聞で、学校で「田植えをやった」「稲刈りをやった」という記事が新聞に載っていて驚いた。体験することで話題になっているが、そうではないだろうと。
- 田植えをやるまでの間に農家は一体何をやっているか、田植えが終わった後に一体どういう自然との闘いをしているのか、ということを学校で本当に勉強しているのだろうかと思った。
- 私は東京の子ども達を、栃木県の私の実家の田んぼまで連れて行って田植えをさせたが、前後の学習を1年間かけてやった。子ども達は自分達の米を売りたいくなり、皆に食べてもらいたくなり、大変でしたが、でも子ども達は自分達が本気になればそこまでやる。
- ただ子ども達に田植えをさせたい、稲刈り体験をさせたい、それが本当に自然と関わる話なのかというと、それは違うのではないかと思う。やまほいくの発想は、ただ子ども達を自然の中に入れるということではない。自然の中で子ども達は、どんな失敗をして、何を考えたか、どういう風に自分達は生かされているのかを学んでいく。
- 学校における体験活動もまったく同じで、先生たちは良かれと思って行うけれ

ども、そこに意味を持たないといけない。また、子ども達が課題意識を持つことが大事だと思う。

- あらためてお話をすると、今、日本の状況はとんでもないことになっている。お年寄り（65歳以上）が多く、他はどんどん人口が減っていき、2040年頃になると、お年寄りの人口も減っていく。
- 2050年頃にはものすごい勢いで人口が減る。日本よりも進行している国はないので、世界中が日本の少子高齢社会に着目している。
- このような状況の中で、20年後を想定して今の学習指導要領ができた。一体どうなるのか。20年後には子どもの数は3分の2になってしまう。私たちは何をすべきか。長野県の人口も間違いなく減っていく。どんなに頑張っても、色々なシミュレーションをしても、増える要素は乏しい。
- 今の私たちの国のやり方だと、こちらは長野県の小中学校の将来人口推計だが、小学生と中学生、本当に悲惨な状況。地域毎にデータを出してみると、20年間で子どもの数は3分の2になる。そのときに、今行っている教育活動ができるかどうか。
- 中体連の学校対抗の部活は無理。今の日本の法律では、学級数に応じて教員が配置される。現状の国のルールだと、2学年合わせて16人よりも人数が減ったら、2学年一緒に複式学級にさせるようになる。しかし、全国どこでもそれではやっていけないということで、長野県では2学年合わせて8人までは、県がお金をだすので加配教員を雇っていいよという状況になっている。
- これでもやっていけない市町村があって、特に村費や町費で、2人しかいないけれども1学級にしている。そういうところもある。だから子どもの数が減ってくると学級数も減るし、教員の手当や給料、お金が無くなってくるので、やむなく皆統廃合していく。そして学校によっては複式学級、2学年以上の子どもを一緒にしていく。
- 中学校もまったく同じ。そうするとこれからの教育は、もう学校統廃合には限界があるので、今までと同じことができない。発想を変えていかなければならない。
- 地域を大事にしたいけど、地域の行事を今まで通りやるかということ、地域ももたない。地域もお祭りを含めて色々なことが今までどおりできなくなる。社会で求められる能力も変わってくるのだけれど、学校は昔と同じことやっていても、子ども達がかawaiiそう。そういう発想の転換が求められている時期。
- 今全国的には4つの政策があって、①学校統廃合する。②小学校と中学校を一緒にする。なんでそういうことをするかということ、中学校がもたないから。中学校の人数配置だと、英語と国語と数学の先生は置けるけど、音楽の先生を置くだけの

人数はない。家庭科の先生はとれない。美術の先生も置けない。人数的に。だからそういう先生は、3校掛け持ちで技術を教えて回る。本当は子どもとゆっくり話がしたいのに、それができない。これが全国状況。

- だから、小学校と中学校を一緒にして、小学校の図工を教えながら、中学校の美術を教えるなどにして、専科—専門性の高い先生を学校に置いておけるような仕組みを作る。そういうために小中一貫教育が、全国の過疎地で加速度的に増えている。私が関わった信濃町の小中一貫校もそういう理由が大きい。
- それから、③ICT活用。これがなければ過疎地の小規模校は存在できない状況になる。ICTは必要不可欠な時代になった。とくにネット関係で、教室には2人しかいないけれど、栄村と繋がる、飯田市と繋がるようにして、合同で授業を行うことを私たちの研究チームでやり始めた。段々慣れてきて、先生達の日常のツールになっている。
- 木曾郡の小学校同士で、20分休みに、特定の場所に置いてあるタブレットを子ども達同士で勝手に繋いで、他の学校の友達とおしゃべりしている。そういう学校が増えていく。そうせざるを得ない時代になってきた。
- ところが、学校はセキュリティが高くて、セキュリティの考え方を変えたらいいと思うが、ウィルスを警戒してUSBメモリーを差しちゃいけない学校もある。それから学校のパソコンしか使えない等のルールがある。先生方が自分のパソコンを学校に持ち込んで繋いじゃいけないというルールの自治体や学校もある。
- 世界中にそんな国はないと思う。日本だけは先生を信頼しない国というシステムになっている。そうすると先生達はセキュリティ意識が高まらない。どういうことをしちゃいけないのか、何が危険なのかを学びつつ、一番快適で一番都合のいいようにやるには、家でも学校でも同じ端末で使えるようにすること(BYOD)。これがどんどん先進国で始まっている。すると行政が5年に一回全員に一台タブレットを買うという莫大な資金を使わなくて良くなると思う。
- 時間の関係で先にいくが、④地域との連携…コミュニティスクール。長野県では信州型を実施していて、学校のお手伝いをするということが今の状況だが、地域の人が学校を自分の居場所にしちゃう。
- 中学校の数学の授業におばあちゃんが参加したという青木村の事例があるが、いいじゃないですか、そういうことも。須坂高校の哲学対話の授業に、大人も参加していこう。教育問題だから教育委員会の人も呼ぼうよ、と。方向性を閉じないこと。
- 小学校も中学校も困ったところを助けてね、だけではなくて、大人が学べる学校、スクールコミュニティ。次世代型の学び。私たちの発想を変えていく挑戦ができたらいいなと思う。

- 当たり前、普通からの脱却。本当に12～18人学級が適正か、私達教育学者は毎年提案しているけれども、国はお金がないので、教員を増やせないと財務省から断られている。今のところ、12～18人学級というのは、集団一斉画一授業をやって全員に同じコンテンツを与えて集団授業をやるには、いいサイズ。クラス替えもできて。
- でも、これから個別最適化とって、一人一人の学びに合わせて、その子の個性を活かしながら色々鍛えていくような学びをするには、今の状況だと学級人数が多い。1クラス30人も多いくらいなので。
- だから、少子化を逆手にとって、新しい学びを考える必要がある。「大きな学校だと、競争力がついてどこにいても大丈夫だと。小さな学校だと、人は良いのだけど、場慣れしてないから、落ち込んじゃうとか。高校にいった途端に不登校になる…」、そんなことはない。
- 田舎の中山間地の大人が、コミュニケーション能力が弱いかというとは全く逆。本当に小さい村では、それで生きていかななくてはいけないので、年齢を超えてコミュニケーション能力も高いと思う。私たちは、今までの発想を少し疑っていく必要があるかもしれない。
- ノルウェーの島に取材にいった時に、全校児童が7人しかなくて、校長先生に、「こういうところで困ることや良いことはなんですか」と聞くと、「これしかないから、この島で一校しか学校はないので、この子達で生きていく。嫌いな子はある。合わない子もある。けれども、ここで生きていかなければならないから、折り合いをつけなければいけない。対人関係能力・調整力とかが鍛えられ、自分のことを主張しながら、相手を受け入れていくことを勉強することになる」とおっしゃっていた。
- わが家の子どもは、3クラス程の学校で育ったけれども、友達関係は全然変わらなかった。保育園からの知り合い同士、部活が一緒の子、ほとんど変わらなかった。本当に大きな学校だと切磋琢磨して人間関係力が育つのか、皆さんよく観察してみてください。
- 少し端折りますが、異学年学習をわざと取り入れて、子ども達にとって生きるとはどういうことなのか、学びと生活を共にするイエナプラン校が佐久穂町にできた。今年の4月から軽井沢町の風越学園ができた。同じようなコンセプトの学校。
- 今までの学校でやっていたことに、少し疑いをもって、いい事もあるけれど、もっと大事なことがある、ということから始まった学校。コロナが明けたら是非参観に行つて欲しいと思う。私の仲間が学校づくりをしている。
- ここからが本題。子どもの側に立つということ。今まで当たり前だと思つてきた

ことを疑ってみると、目的と手段が混同されていることに気づく。いつの間にかやるのが目的になってはいないだろうか。私自身も反省することがあった。近くだと長野東部中学校で、教科主任会が設置されている。これは先生方ではない。子ども達。各クラスに、子どもの数学主任や英語主任がいて、教科主任会で教科毎に生徒が集まり、「この単元はここが重要」だとか、「こうやってまとめるといいな」と協議しながら活動している。

- テスト前に学年の生徒にアドバイスする。時には先生に見せない。「今度のテストはここが山だ」と言って。この学校は、学年担任制を導入して話題になったが、そこが目的ではない。生徒を主体にする。今までは、「言われたとおりにやれ」「言うことを聞け」ということをやってきたけれども、「自分達でどうしたいのか考えろ」という発想になったということ。そのひとつの例。
- これが今お話ししようとした問題。自律的に学ぶとはどういうことか。自ら目的や目標、方法を考え、見通しを持って自分なりの規律に従い、自分のペースで問題解決に取り組むこと。
- 英語でいうと「Autonomy」という単語になる。私たちは今まで他律的に学ぶ子を育ててきたかもしれない。指示命令を与えて、規律を与える、学習課題をこちらが与える。それに従って子どもが上手に学ぶ。その上手に学べる子を育てていって、そういう子が学力を高めると信じていたのかもしれない。
- 先生はこうした方が良いよと言ったけれど、自分はこういうやり方をしたい。自分なりに変更してでも、自分なりに学べる力をつけたい。そういうことを学校でやってきたかという、残念ながらそういう余裕もなかったし、私達大人もそういう学びを経験したことがなかった。
- これから必要なのは、自律的に学ぶという力。これは家庭学習だけでは難しい。学校でもっと訓練しないとできない。担任の先生が、「起立、気をつけ、前ならえ」と全部従わせておいて、その先生が教室では、「はい、総合的な学習は君たちが思うようにやっごらん」と言ってもたぶん無理。
- それぞれの授業や生徒会指導、児童会指導、清掃指導、給食指導、そういうことと、子ども達の家庭学習の指導は一貫した考え方で繋がっていないと子ども達にはプラスにはたらない。おそらく幼児教育小中高一貫してみんなが共有すべきコンセプトや理念みたいなものが必要だと思う。
- それがこの委員会で出せたらいいかなと思う。私は教育学者なので、主体的な学びを実現させる力として、自己学習能力、自分で自分の学びを作っていける力をつける、自律的な学びの力をつけるためには、授業はどうあるべきなのだろう、生活指導はどうあるべきなのだろう、という角度から考えます。先に校則があつて守りなさいではなくて、この学校にどういう決まりが必要かなと考えるぐら

いの発想の転換、子ども達と一緒に生活を作っていく、考えていくという観点、そんなことが必要だと思う。

- こういう発想に基づいて県内いろんな所に学習指導に行っているが、今日は時間の関係でここまでにする。では、これでどのような授業が考えられるか、興味がある方はまた別の機会に。自律的な学びに係ることでお話をした。

(4) 次回内容について

伏木座長：

- 時間も時間なので、事務局からその他、何かあれば。

事務局：

- 次回は、委員の皆様から自分のテーマを決めていただき、発表をいただきたいと考えている。次回とその次、2回にわけてお願いしたい。次回は5人の方からいただきたいと。5人の方をどのように選ぶのか議長に決めていただきたい。

伏木座長：

- ローテーションを決めたい。子どもに合わせて、年齢と発達段階に係る順番でいかが。低学年、年齢に係る順番で、高校に向かっていく順番で。

事務局：

- それでは次回は、羽入田先生、垂澤先生、小学校の方で佐藤先生、月岡先生、それから中学校の方で島田先生ということはいかが。その次の回は、勝山先生、本多先生、近藤先生、山岸先生、久保田先生。

伏木座長：

- よろしいか。委員の皆様それでお願いできますか。どんな話題を提供するか、何か枠組みはなくてよろしいでしょうか。時間や、資料が必要かどうかとか。

事務局：

- 時間は1人5～10分のプレゼンテーションをお願いしたい。資料についてはもしお配るものがあればこちらで印刷する。今日と同じように画像で出すこともできる。パソコンもこちらで用意する。発表の後は委員の皆様から、発表に対する質疑をしていただければと思っている。

伏木座長：

- 発表いただく委員の皆様のスケジュールを整理してもらって、資料を送っていただければと思う。

4 その他

伏木座長：

- （最後に）教育長からお願いします。

小林教育長：

- いろいろありがとうございました。第一回目もそうだったが、お一人お一人の語ってくださる内容が、とても参考になり、最後の伏木先生の話の中には、考えなければならない課題が沢山あった。
- 今まで何気なくやってきたことが、本当に意味があるのかどうか、私が最初に申し上げた「あってもなくてもいいものは」を頭にいれながらお話をお聞きしていたが、私の中でも少しずつ整理ができてきたような気がする。
- 先ほど山岸委員からお話しいただいた須坂高校の授業を見た感想の中で、いわゆる「反転授業」—予習を中心とした学習をしていくことによって子ども達の目がキラキラ輝いていくという、そういうことは、小中学校でもきちんとやってみて、初めて先生達が自分事になっていくのかなと思う。
- 自分で考えることと皆で考えることの区別や整理は、これから本当に大事ななと思い、お聞きしていた。大変参考になった話し合いをありがとうございました。

5 閉 会

事務局：

- 以上で、第二回のあり方検討会議を終了します。
- 次回は、10月26日月曜日9時30分からです。